

臨床獣医師から見た

養鶏業界 54

株式会社ピーピーキューシー研究所 加藤 宏光

情報といふもの

著者がP P Q C研究所を開設した頃にコンピュータが普及しはじめました。またその頃情報化時代という言葉が流行り病のように広がってきました。しかし、情報とはどのような受け止めるべきかは明確に理解されてきたとは言えません。

情報は毎日のラジオ、テレビニュースや雑誌で豊富に得られます。しかし、どの情報が自分に有益なものかを取捨選択する目が養われていないければ情報は単なる文字、単語の羅列に過ぎません。マスコミから得られる情報のみを前提として社会の動向を推察することで、今後の社会動向をかなりのレベルで読み解くことができます（ちなみにCIAーアメリカ中央情報局で利用している情報の七〇%以上が一般マスコミからのものだそうです。昨近テレビなどで大騒ぎしているロシアのスパイ騒動を見聞きすると、極秘の情報がそれほど多いことに驚かされますが、経

済社会を泳ぎわたるために必要な概観的諸情報は、さほど大げさなルートによるものではありません。

社会と業界の結びつき

今を遡ること二三年前に、わが国のバブルは最高潮に達していました。この時期には東京の大手書店を覗いてみると、女子大生とおぼしき若い女性までもが株に熱中しているように、株取引の書物（特にチャートが掲載されている雑誌）のページを夢中になってめくっていたものでした。株取引で女学生までもが小金を得ることが可能な社会が健全なものとは思えない著者にとっては、街角で見かけるこうした風景が何となく忌々しく感じられてなりませんでした。

株という魔性のもの

ちょうどその頃、生産者の集まりで鶏病に関する講演を頼まれました。東京で開催された会合の後の懇親

会でのことです。ある若手生産者が自信たっぷり著者に話かけてきました。彼はその次の年度に一〇万羽の拡張を行い、全体で三〇万羽を目標にするのだと意気込んでいました。そして著者に「資金の目処はついてる」と話してくれました。

具体的にどのような資金繰りをつけるのかをディスカッションするほどの付き合いではなかったため、「元気が良いのは結構なことだ」といった程度の気持ちで話を聞いて別れました。

ところがその年のうちにバブル経済が崩壊し、経済が混沌としてきました。先の生産者と一緒に仕事をする機会はなかったため、その後数年間は彼の音信を聞くことはありませんでした。しかし、ほどなくして聞いた消息では、彼は「株の暴落で大きな損を被り、農場を維持することができなくなったため業界を離れた」との話でした。

著者なりに推測すれば、彼は農場拡張資金をうなぎ登りに上がった株を売ることで手当てしようとしていたのではないのでしょうか。運悪くバ

ブルに遭遇し、拡張資金どころか維持資金までショートさせ、ついには経営を諦めることになったものと推察されます。このような事例は一つだけではありません。この時期のわれわれの業界に限っても、いくつか思い出されます。

虚業と実業

著者はモノを製造する、もしくはそれに直結していない業態を虚業と位置づけています。株や先物を含む商品取引、あるいは金融業は著者にとっては虚業です。

ある情報によれば、虚業に動く金(マネー)は実業のその二〇倍を超えるのだそうです。それだけの金額にマネーが動くのを考えると、これほど長期間に渡ってデフレが続くのは腑に落ちないことですが、モノの価格が低い方へと傾斜する傾向はなかなか止まりません。しかし、モノを生産しているという説得力に勝るものはないと信じています。

二〇〇八年の夏過ぎに突然世界の

経済を襲ったかにみえるリーマンショックも、それが虚業であるという前提で理解していた人にとっては当たり前の成り行きと言えます。

それより驚いたことは、パナソニックやトヨタといった世界を市場にしている国際企業において、北京オリンピックを当て込んだ見込み生産に対する需要の伸びの悪さゆえに大きな在庫を残し、その不良在庫調整のために生産を大幅に削減せざるを得なかったという事実です(一説では、リーマンショック以後の数カ月の工場稼働は半分に届かなかったとも聞きます)。「世界を股にかけて活躍する超大企業が、世界経済の動向を読む間違えて、不良在庫を山ほど抱えてしまう」といった情報の消化不良には、呆れざるを得ないと思っております。採卵養鶏業界のように未成熟な産業界でさえも、右肩上がりの時代を過ぎた今日では、需要に応じた規模拡大でなければ企業の存続が危ぶまれる、といった時代に……!!

実業を営むにあたって、事業拡張資金を虚業に頼るとすれば、いつどんなリスクが生じるかは予想もつき

ません。しかし、バブルの頃から今日に至るまで、突然起きる円安による飼料コストの高騰に対しては虚業に依存したヘッジの方法がとられることがままあります。ドルやユーロの先物デリバティブがそれです。ドルが高騰した場合にはいきなり飼料コストが跳ね上がります。

二二〇二四年前に国民経済研究所主催で先進型畜産

の実態を視察する、という目的でデンマーク、オランダなどの畜産国を旅行したことは以前に触れました。日本を出発するとき二四〇円ほどであったドルが、約二週間のツアーの帰りの機内でみた日本経済新聞では二八〇円に高騰していました。一緒にいた採卵養鶏会社のオーナー社長の皆さんは口々に

「エサ代が急上昇するぞ!」と語り合っておられました。このケースではドル相場を前提にして一五〜一七%も飼料コストがかさむことになり、飼料代は生産コストの六〇%強を占めますから、もし飼料費が一五%上昇すれば生産コストは九%以上も上がることになります。当時の五年間平均の利益は(経営内容によりま

《コラム》

【賭け事の鉄則】

著者は基本的に賭け事はしません。不労所得そのものが好きでないことがそうさせているのでしょうか!! しかし、本文で述べた方法で賭け事に勝った経験があります。

もう22~23年も前のことです。

当時フィリピンで経済行為のシミュレーションとして、小さい採卵農場を運営しようとしたことがあります。当時のフィリピン採卵養鶏は、日本のそれと比較して30年遅れで歩んでいました。30年前からの道筋を知っている者にとっては、タイムマシーンを使って過去と現在を行き来しているかのような感覚があります。ここで養鶏経済をシミュレーションしてどう成果が上げられるかに興味を覚えたからです。

指導のため毎月状況の確認に出かけていきました。あるとき、地元の闘鶏場へ立ち寄りしました。そして地元の人に薦められて賭けてみました。「負ければ倍額を賭けて勝つまで続ける」という方法で……。勝ったところでやめれば当然勝った金が残ります。

著者はその全額(といっても2万円余り)を農場スタッフの福祉用に提供して終わりました。こうすれば後に未練を残すことはありません。

賭け事は「遊び金が無くてはやってはいけないものだ」と実感した経験でした。

すが)二、五〇〇〇三、〇〇〇万円程度でしたから、利益のほとんどが飼料コストの上昇分で消えてしまうこととなります。

ドルの強弱に関する情報を得て対策を打てるのか、という課題を考えると、この情報をいかに利用するかには相当度の実力がいります。

銀行が販売しているデリバティブの一種に、想定価格でドルあるいはユーロを先買するというものがあります。例えば、現在の円・ドル比率は九〇円強です。そこで、今日のレートで毎月五、〇〇〇万円分ドルを買うという契約を結んだとします。年間五億円になります。もし、先に挙げた例のように一五%ドルが値上がりしたとき、毎月七五〇万円分の差益が出ます。つまり、毎月五、〇〇〇万円分は今の九〇円/ドルで飼料が購入できると同じこととなります。もちろん差益は飼料コストを相殺して考えているのですから、メカニズムに誤解のないように……。

都合八、二五〇万円もの利益を本業外で得られるのですから、なかなかのものです。しかし、こういった

商品には思いがけない落とし穴が潜んでいます。

その第一は「通常三年間」を一位として契約が結ばれます。その間に円が高騰した場合にはリスクをとらなければなりません。先の例では九〇円/ドルですから、この先、さほどドルが高くなることはないでしょう。しかし、ドルを購入したのが一昨年当時のレート(一一五円/ドル)このレートはリーマンショック前のアメリカにおけるバブル環境下で円が弱くなる可能性を云々される状況であれば、かなり有利なレートと思われる(ご購入していただくとすれば、現在のレートとの差は二五円で一七%ほどの差損になります。先の例で考えれば毎月八五〇万円ほど損をすることになります。これは年間で一億円にもなることを意味しています。

このような先物で損をカバーする方法は、下がった相場でヘッジできる分だけ同じ銘柄を「買い増す」手法です。つまりは、賭け事は十分な資金余裕がなければ必ず損をする、という鉄則に一致するものです。

